

ショートレクチャー

「北方民族とアイヌの熊送り ハンテイの熊送りにおけるクマの歌から明らかになったこと」

東京文化財研究所名誉研究員 星野 紘

一、映画「トールミの子どもたち 西シベリア ハンテイのクマ送り」について（補足説明）

このたび岡田一男さんからハンテイの熊祭りの映像を当該学会で上映するからとの話を伺い、是非その場に参加したいと申し上げた。というのも 1998 年にハンテイの現地でそれを採訪したことのある者として上映される映像などを確認したかったからである。その折岡田さんからコメントを添えてほしいと頼まれ承諾していたのだが、その後小生によんどころない用務が発生したため、こんな格好で参加者の皆様にお話しすることとなった。

一、映画「トールミの子どもたち 西シベリア ハンテイのクマ送り」について（補足説明）

前半部分では、氏が実際にご覧になったオビ川下流、カズィム川流域の北部ハンテイのクマ送りと、アガン川流域の東部ハンテイのクマ送りの比較や、ハンテイの研究者、チモフェイ・モルダノフのさまざまな研究を紹介されています。今回の 20 分には収まらないため、上映では割愛せざるを得ませんでした。

以下は、星野紘さんのレクチャー事前稿の後半部分です。事前稿の全文を参照希望される方は、下記からダウンロードして下さい。 <http://tokyocinema.net/jefs41/hoshino-hiroshi.pdf>

太陽 118 号熊祭 <http://tokyocinema.net/jefs41/taiyou118-kumamatsuri.zip> 平凡社提供

問合せ： k-okada@tokyocinema.net

二、ハンテイの熊送りにおけるクマの歌と アイヌの場合との異なる点、似ている点

このことに関して大林太良氏が、うまく説明しておられたと思われる点と今後検討課題を残していたと思われる点の二つを記していた文章があるので紹介したい（雑誌『太陽』1973 年 118 号掲載「熊祭」）。まず同人は熊祭りがシベリアから北米大陸、北欧に及ぶ環北極圏域に広く分布現存していることを図 1 1 の分布図を掲げて示していた。そしてこれらは山中で熊を仕留めた時に行う形式のものと、仔熊を村に連れ帰って育てそれが大きくなってから殺して執り行うものとの二つのやりかたがあって、アイヌの場合は後者で、ハンテイの場合をはじめ多く民族の伝承は前者であると述べ、アイヌのような飼いを殺して執り行う伝承はアイヌ以外にもギリヤーク（ニヴヒ）、オロチヤなど沿海州から樺太、北海道に至る地域の民族にのみ行われている。前者が原初的やりかたで、後者は以降に始まったであろう述べた。つまりアムール川流域のように家畜飼育を行っている近隣地域の農耕民文化の影響下で展開したものでなかったかと推定しておられた。このことがまずアイヌとハンテイ双方の伝承の相違点と言ってよいだろう。具体的には熊祭り（イオマンテ）の行事次第日程にそれが現れている。アイヌの場合には、飼いを殺戮する次第と熊の解体、さらにその頭部への所為、眼球や脳味噌などを取り出し、その後鉋屑を詰め込んだり、また笹の葉を口に食ませて舌に見立てたりなど新たな熊の頭部を成形する次第に力点が置かれる。歌や踊りやユカラの語りなど遊びの部分はそれら各次第の終了時の祝宴の次第などにお

いて演ぜられるにすぎない。ところがハンテイの場合にはこれが逆となっている。熊の殺害、肉体の解体などはそれを捕獲した森において済まされていて、ぬいぐるみ状の頭部が村へ運ばれ、いわゆる熊祭り（遊び）が家の中で執り行われるが、ほとんどが歌や踊り、滑稽寸劇などなどのパフォーマンスの次第一色である。

他方双方の類似点は先述のようなパフォーマンス部分に求めねばならないのだが、前一项で見たようにハンテイの演目の多くを占めていた仮面や仮装の演目がアイヌのイオマンテでは見られない。この違いをどう考えるべきかが問題となる。ところが、大林氏が先の一文で注目すべき仮説であると賛意を示していたのが、知里真志保氏の、かつてアイヌの熊祭りの折に巫女による仮装舞踊劇が行われていたという考えである。知里氏は「神謡」という文章（『アイヌ神謡集』岩波文庫に所載）において、アイヌの熊祭りにもその種の演目があったはずで、その形跡はカムイユカル（神謡）に伺えると次のように述べていた。

古くアイヌの社会には祭儀の際に演じられる習いだった呪術的仮装舞踊劇があり、そういう仮装舞踊劇においては、シャマンが獲物たる動物—それがアイヌにおいては神である—に扮して、その鳴き声を発しながらその行動を所作に表して舞うことが行われた、その所作、およびその所作をすることがユカル、すなはち、「獲物の真似をなす」ことだったのである。

カムイユカルは熊祭りの場からご婦人たちの手にゆだねられて今日至っているが、いつごろまで熊祭りの場で行われていたものであろうか？

他方大林氏は知里氏が推定していた仮装舞踊劇に類似するものが、ハンテイ（オスチャーク）やマンシー（ヴォーグル）、ケットなど西シベリアの民族にも行われているとして、関心を寄せられていた。ところが次のようなハンテイの場合についての記述はなお精査を試みる必要のあるものと思われる。オスチャク族は熊を殺したあとで催される祭宴において、白樺の樹皮でつくった仮面をかぶった男が熊踊りをする。男は熊の動作の真似をし、腕を奇妙に振りまわし、熊のようにぶざまに跳び回ったりするのである（前掲の「熊祭」）

この記述の根拠、出典が何か確認できていないのだが、仮面をかぶった男の熊踊りの存在はハンテイの場合には確認できない。翻訳資料Ⅰ、Ⅱを見ていただいてもその形跡はないし、また小生の採訪時においてもなかった。ただしk・Fカリライネンの『ウゴール民族の宗教』にはマンシー族の仮面舞踊の挿絵（図12）が挿入されており、ひょっとしてこの記述はマンシーのことなのかもしれない。ハンテイでは、強いて思い当たるとすれば、図4に見るような「熊の歌」の演目である。熊の誕生時に天界の創世神トールムと関わっているくだりはアイヌの神謡（ユカル）には存在しないが、獣としての森の中での熊の行動ぶり内容はアイヌのものとも共通しているかと思う。ハンテイの「熊の歌」では、餌あさりの困難さ、夏、蚊や虻に悩まされる熊、熊穴作り、猟師による自らの肉体の殺害等々の熊の自ら語りがあり、アイヌのカムイユカルでも餌あさりのこと、熊殺害のことなどが同じように語られている。ただしハンテイの場合には七人とか五人とかの奇数メンバーの歌い手が互いに小指を結びあい、その手を前後に振り動かして口頭で熊の生態を叙し歌うのみである。ハンテイの「熊の歌」とアイヌの神謡の中の“熊の歌”の比較検討を、知里真志保説を軸にして今後検討を深めるべき課題のように思う。